



Title	森三樹三郎先生追悼受業生文集
Author(s)	
Citation	中国研究集刊. 1987, 4, p. 40-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61011
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

森三樹三郎先生追悼受業生文集

序

大阪大学名誉教授、森三樹三郎先生は、昭和六十一年八月二十九日未明、病逝された。八月三十日密葬、九月七日に浄土宗転法輪寺（京都市）において本葬・告別式が行われた。導師、水谷幸正氏・深貝慈孝氏。喪主、美佐尾未亡人。法号、樹正院理誓三玄慈容居士。葬儀は、本田済氏を委員長に、大阪大学・仏教大学の関係者によって手厚く行われ、多数の参列者があった。

森先生の生平については、『森三樹三郎先生古稀記念論文集』（一九七九年・朋友書店）所収の略年譜・著作目録がある。今は亡き先生を偲んで、ここに大阪大学における受業生の追悼文（五十音順）を集める。私は受業生ではないが、葬儀当日、故先生に捧げた弔辞を録し、もって本研究室として哀悼の意を表し、かつ、この追悼文集の序とする。

弔辞

謹しんで、大阪大学名誉教授、故森三樹三郎先生に申しあげます。

私が先生に弔辞を捧げる運命になろうとは、思いもかけぬことであり、まことに哀痛の思いに堪えません。

先生は、旧制大阪高等学校教授を経て、昭和二十四年から昭和四十八年御退官に至るまでの二十四年間、大阪大学文学部に在任され、大きな貢献をされました。

先生を称うべきことがらは数多くございます。しかし、私にとつての先生とは、やはり何にも増して、学問的巨人としての先生であります。

昭和十九年刊の御著書『支那古代神話』に始まり、今年一月刊の『老荘と仏教』に至るまで、森学の山脈は聳えたっております。

たとえば、博士学位論文『上古より漢代に至る性命観の展開』は、天の性と天の運命と、すなわち天性と天命両者を跡づけら

れた大作であります。論証の精密、解釈の独創と相俟って、画期的な業績であります。

その大山脈に、さらに高き峰を加うべく、これまで研究者の目に触れる機会の少なかった幻の名作、『六朝士大夫の精神』をば、今年お迎えになられた喜寿の記念として世に出すことを企画いたしました。そして仏教大学・大阪大学の門下生の協力の下、この九月、刊行の運びとなっております。

病床の先生は、その日をどれほど楽しみにしておられたことでありましょう。にもかかわらず、先生は、刊行を目前にして、往生されました。たれが思い及んだでありましょうか、喜寿記念たるべき御著が、先生のま新しい墓標となろうとは。

しかし、この墓標『六朝士大夫の精神』こそ、先生の代表作として、不朽の傑作として、中国思想学界に永く光芒を放つてありましょう。

その光芒に包まれて、先生は、往きて生くる——往生をなされるのか。「命終るときに臨んで、心顛倒せず、心錯乱せず、心失念せず」とや。最後までしっかりと浄土に向われた先生に、献すべきことばとして、私に何が残されておりましたか。嗚呼、維の時や九月、「蟋蟀^{せむし}堂に在り。歳^{とし}聿^{つひ}に其れ莫^なれん。蟋蟀^{せむし}堂に在り。歳^{とし}聿^{つひ}に其れ逝^はかん」。

昭和六十一年九月七日

大阪大学教授 加地伸行

森先生と豊川稻荷

宇佐美 一 博

私は森先生の大学での直接の教え子ではない。私が大学院に入った時、先生はちょうど定年退官で大学を去ってしまった。直接教えるようになったのは、それから七年ほどたったからのことである。当時先生は自宅で数人の方々と『資治通鑑』を読んでもらわれた。以前からなんとか先生の教えを受けたいと思っていた私は、無理にお願いしてその会に参加させてもらった。毎週一回。確か水曜日だったと思う。午後七時半頃から約一時間。こちらが予習で自信のない箇所は、必ず、先生の方から「そこはどういう意味ですか」と尋ねられた。感服するとともに、この次こそは、といつも思うのだが、毎回そのくり返しであった。終わったあとの先生との雑談も楽しく有益であった。研究上のことはもちろん、先生の恩師や学生時代の話など、いろいろなことが話題にのぼった。思うに、先生から教わったことは、助字の意味一つをとってみても、おそらく独学ではぜったい身につかないものばかりであろう。先生に師事しえたことを大へん仕合せだったと思っている。

もう一つの思い出は、豊川稻荷にご案内したことだ。豊川稻荷はもともと曹洞宗のお寺であるが、神仏混淆の具体例とし

てよく知られている。先生は宗教方面のことにかなり関心をもっておられ、豊川稲荷についても、雑談の折に、「話には聞いているが、いつかこの目で確かめてみたい」とよく言っておられた。そのころ私はちょうど豊橋にある愛知大学に奉職することになり、豊川稲荷は目と鼻の先なので、この機会にぜひご案内したいと思った。先生のご健康が心配だったが、お話しすると、日帰りではなくということでも心よく承諾して下さった。当日豊橋へは先生はお一人でこられた。改札口を出ると、先生はまず、「名所旧蹟の案内はしていただくなくて結構ですから、町の中を少しぶらっと歩いてみませんか、町の雰囲気がいいたいかわりますから」、と言われた。お一人で気楽だったせいもあらうが、あとで考えてみると、森先生のご性格がよくあらわれているように思えた。先生は史書を読んでその時代の雰囲気・精神を知るのを好まれたが、何かそういう態度と共通するものをふと感じた。豊川稲荷へは、小雨が降る中をたのんでおいた女子学生に車を運転してもらって行った。そしてそのあと、直接のお弟子さんである安本先生とおちあつて、御油の旧東海道の松並木も見た。しかし先生は豊川稲荷だけで十分満足しておられるようだった。

スケジュールが少しきつかったので、先生がどんな印象をもつて帰られたか気になっていたが、その後ある会で講演された時、先生は話の途中で、豊川稲荷に行かれたことになうれしそうに言及された。私はそれを聞いて、ご無理をして来ていただいてよ

かったと思った。

森三樹三郎先生

——その学風とお人柄

河田 悌一

ひろく中国の学術思想史の流れに目をやると、そこには二つのタイプの学者がみられる。博雅を誇る「博」の立場にたつ学者と独自の見解を持する「専」の立場にたつ学者、である。たとえば、清朝考証学の全盛期に蘇州に住んだ呉派の惠棟あるいは錢大昕などは「博」のタイプであり、安徽省出身の皖派の戴震さらに独特の歴史哲学をきずいた章学誠などは後者の代表といえるだろう。

わたしの阪大で学んだ二人の恩師の学風をふりかえってみると、木村英一先生（一九〇六―八一年）は「博」の学者であり、森三樹三郎先生（一九〇九―八六年）はどちらかというと「専」の学者であつたようにおもわれる。

先生は、その著『中国思想史』上、下（レグルス文庫、一九七八年刊）を読めば明らかなく、古今を貫き東西を兼ねる幅広い学識をもっておられた。が、ご自身は博識にとどまるこ

とを拒否しておられたようだ。つまり、学者であるからには博識は必要不可欠ではあるが、それよりむしろ、自分自身の独自の見解と主張をもつように心がけておられたのである。そしてそのことを、わたしども学生にも求められたのだった。

そのため先生は、わたしが授業を受けていたころは、さかんにマックス・ウェーバーを読むように、といっておられた。岩波文庫の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』はもう読みましたか、新しい訳の『儒教と道教』はどうですか、と訊ねられた。

理論の書を好まれたのはおそらく師の小島祐馬先生の影響であつただろうが、そうした志向からして、先生はこの年代の中国学者にはめずらしく（？）、中国の風土にロマンティズムを抱いたり、書画骨董といった中国の文物を愛玩されるようなところはあまりなかった。

しかし先生は、理詰めの、冷え冷えとした「知の人」では、けつしてなかった。むしろ先生は、本質的に「情の人」であつた。お子様がおられなかったからでもあろう、わたしども学生、弟子さらには後輩の方がたを、きわめて暖かく親身になって遇された。その生活に心をくばり、就職の世話をし、結婚の相談にのって下さった。

酒を一滴もお飲みにならないのに、年始にはご自宅に門下生をあつめて酒宴をひらき、トックリの数の増えるのを、いつも笑ってみておられた。また皆でする一泊旅行を楽しみにしてお

られた。

先生は若いころから頭脳明晰な方であつた、と大高時代のある同級生の先生からうかがったことがある。

わかりやすい口調でなされた講義と講演は、達意の文章とともに、いつまでもわたしの心に残りつづけることだろう。と同時に、ときおり鋭く光るメガネの奥のやさしい眼が、はやく「一家の言を成す」ように、とわたしどもに求めておられたようにおもわれる。

森先生の思い出

岸田知子

火曜日の二時間目は通鑑の演習でした。学部生を中心にした授業で、院生は出たり出なかったり。（おまけに、前日の木村先生の授業の後、飲みに行ったりした人は遅刻をしがちでした。）従つて、学部に入りたての私が先生の部屋に入ると一番乗りということも多かったのです。この、部屋に入るといのが毎週の難題で、早く出校しておられた先生は、演習機の向こうの定位置にきちんと座って待っておられるのです。一人で入つていて、次に人が来るのをじっと待っているのがとても気詰まりで、ノックがあるとはとしたものです。先生は何人か揃うまで黙っ

てたばこをすっておられました。ふたり位しか出席しない時もあって、私が毎週読んで読むということもありました。これがとても勉強になったと、今、しみじみ思います。出席者の少ない時、先生は決まって、以前、もっと学生がすくなかったころ、だれも出てこないのをずっと待っておられたこともあったとか（たばこを何本お吸いになったことでしょう）、ある年には一人しか受講者がおらず、その学生が京都の人だったので、わざわざ大学に來なくても、おたくで授業をされたとかのお話をされました。

漢文の勉強にと東洋史や印哲の人達、教職の漢文の単位を取るために国文の人達等が受講することもありました。そこで、先生は毎年、助字が出てくると、丁寧に同じ解説をされました。毎年出ていた私たちは、その時の先生の口調までそらんじてしまいました。今、教壇に立つ時、先生の口ぶり通りに言っている自分に気づくことがあります。「へ仍」をスナワチと読むと、そこで素人ということがわかります・・・」

先生は、なるべく早く授業を始め、早目に終えるのがお好みの方でした。日原先生がゆっくり始めて遅くまでなさるタイプだったのと好対照でした。通鑑の授業を十二時に終えて、まだすいている学生食堂に足を運ぶ楽しさを、どういうわけか忘れないでいます。午後の授業までのしばしの解放感だったのでしょう。午後の授業では、私が森先生に学んだ数年間に、いろいろの書物を読んだのですが、やはり最初に学んだ荘子と礼記

の授業が一番印象に残っています。三年生の私には荘子はむづかしく、余りに奥深く、結局その印象が現在にまで続いて、不肖の弟子のまま終わりそうです。

先生がご退官後、ご自宅でおられた通鑑の講読会に参加できないことがとても残念でした。お宅に伺うこともしげしばというわけにいかず、新年会などにも欠席しがちで、先生から忘れられるのではないかと不安に思ったものでした。これから私も人並にご指導をいただけたと思つた矢先に、お別れすることになってしまいました。

森三樹三郎先生を追悼する

黄 濟 清

尊敬して止まない恩師 森先生はとうとうおなくなりになりました。私は不覚にもそのご逝去を三週間以上も存じ上げないでおりました。何時もながら私は学期の始めと終りに大学の帰り、ご挨拶に参ったものでした。今年も七月二十二日家族でアメリカはサンタモニカへ休暇に旅立つにあたって、その前日立命館の帰りおいとまに参りましたが、お留守でしたので先生のお好きな一を保って百年という老舗一保堂の銘茶を近所の大学の友人に託して帰りました。後日、奥様から先生は「黄君は旅

行が好きだな！」というお言葉をいただいたときかされました。その後私達はしばらくパリへ。九月二日に、その五日も前に先生はおなくなりになったとは露知らず、诗情溢るるセーヌ河畔の絵はがきを楽しんでいたこうと一筆添えてお送りしたものでした。今にして思えば奇しくもその日私達家族は終日雨の中をモンパルナスの墓地を逍遙し、カタコンブに赴き死者の世界をさまよっていました。

先生に対する私の回憶は、今を去る二十数年も前に遡ります。が、記憶は歴々として眼前に浮んで参り、熱い感動を抑え切れないであります。一九五八年（昭和三十三年）四月、私は京都大学の旧制大学院へ入学しましたが、大阪大学にも通うことがあって間もなく先生とお知り合いになる榮に浴しました。私は夙に先生の学会におけるご高名と学術におけるご業績に敬服申し上げていましたが、それは来日後間もないある日、寺町の古本屋で手に入れた先生の論著『支那古代神話』『梁の武帝』『六朝士大夫の精神』等を拝読してからでした。先生からご本をいただくようになったのは大学院を出てからのことで、一九六八年の世界の名著『莊子』に始まり、ついで一九七一年の大作『上古より漢代に至る性命觀の展開』等と記憶しています。私は次第に先生の著作を愛読するようになり、且その学説の深さと偉大さには敬服して止みませんでした。先生は私が孟子の研究をしていることをお知りになり、その師小島祐馬先生の『中国の革命思想』を読むよう薦められ、早速弘文堂の七版本

を購読したものでした。尚、偉い先生の先生小島先生が京都に入院された折、一目お会いしたい念で一杯でしたが、間もなく他界され、惜しい限りでした。

その後、私は阪大へ入れてもらったのですが中哲における中国人としては最初でした。毎週一回のご講義と演習ののち、よくお茶にお誘い下さってから帰路に就くことしばしばでした。その折、よくご薫陶を身近にいただきました。更に木村先生のご授業日の帰途にもお宅での読書会に寄せていただき、論語義疏や資治通鑑等を勉強させていただきました。私には忘れ得ない先生のご垂訓に今日あるを思い、今だに懐しくも感謝の氣持で一杯です。

尊敬する先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

森先生と『資治通鑑』

小林 武

「漢文を読むには、知っている文字でも一いち調べないと駄目です。面倒くさいですけども。」

先生は私に穏やかにこう言われた。私が始めて『資治通鑑』を読む当番をした時のことだ。何度か授業風景を眺めてきた私は、たかを括ってそれほど調べもしなかった。時間中、先生は

倦まれることなく尋ねられ、私は「調べていません」を繰り返した。その穏やかな口調は、かえって私を苦しめた。私が先生を思い起す時、きまって「調べないと駄目ですよ」という物静かな響きが聞えてくるのは、時間中「調べていません」を反復していたせいだろう。当時私は中国学を学び始めたばかりの、しかも生意気盛りであった。

先生は『資治通鑑』をご自宅においても講じられ、私もここ四、五年木曜日の夜になるとお伺いした。先生のテキストを垣間見ると、いつもその余白は朱色の注で埋っていた。もちろん先生が知識の該博さを即実証とか即学問と考えられていたからではないだろう。それは先生がまず正確に読むということを経史書にも当然の態度とされていたからに違いない。このことは、先生の論著が明快な歴史観と内向する人間観とに基づいていることを見ればわかる。しかし中国の学が、考える前に知るというその一事のためだけに、人に精励勤勉を強いるものであることは間違いない。先生は余り自らのことを語られなかったが、ご様子では依然として早晨から机に向かわれていたようであった。

ところで、先生は「史書は読まないといけませんね」とよく言われていたし、定年退官時の講演でもその重要性を強く説かれた。一つは思想の歴史的背景を知ること、二つは思想家の実際の行動を知ることからであろう。しかし、何にもまして言葉が思想の体系となる以前に、いかほど生々しい情念を纏いつか

せているのかを察しておられたからではないか。私にはそんな気もする。かつて「私たちは偶たま彼岸への渡し船に乗り合えたまでのことですよ」とふと洩らされたことがあるが、そんな先生からすれば、暗い情念に纏縛された人間の記録は、資料となる前に〈業〉として映ったのかもしれない。

今年の春以降、先生は病に倒れられたが、小康をえた病床には日本の歴史に関する雑誌がいつもあった。ふだんでも先生の日本史の知識は私などをよく驚かせたが、病床から時間を飛翔することは先生の無聊を慰めたのであろう。逝かれる一週間ほど前、先輩の諸先生たちと一緒に私は歴史の雑誌を何冊かもっていた。その日意識の返った先生は、元氣よく食事の話をされたが、翌日から再び幽明の境を彷徨われたという。私たちの持参した雑誌は、先生を呼び戻すことができなかったのだ。

出 合 い

静 慈 圓

ある人との出会いによって、一人の人間が変ってしまう場合がある。

私の属する真言宗で常に言われるのは、宗祖弘法大師空海とその師惠果との出会いがそれである。八〇四年密教求法に情熱

をもって入唐した空海は、中国の都長安の青龍寺において密教系譜第七祖恵果に出合った。この出会いがそもそも空海を空海たらしめた一大事であり、結果として空海は第八祖を継承する。弘法大師を例に出すことは、はなはだ身の程しらずで恐縮であるが、出合いということにおいて大阪大学で森先生とお合いしたことは、私としては生涯の方向を変えた一大事であったのである。

寺に生まれた私は、生涯僧侶として生きていくことに何のためらいもなかった。高野山大学へ入学してから変ったことといえば、何となく学問がおもしろくなってきたことである。そこで卒業後は大学院修士・博士課程と進んだ。大学院の学問は、語学が中心であり、私もサンスクリット語・チベット語に明け暮れて六年ほど過ごした。しかしこの語学を勉強しながらも、この語学がどこまで弘法大師と結びついていくのかということについては疑問を持っていた。

高野山大学では、ある種の習慣として、大学へ残ろうと思うと、大学外で学問を磨いていくことが要求される。いわゆる他流試合である。そこで私も博士課程も終ったのでその選択に悩んでいたが、一応インドへ留学しようとしていた。

しかし生涯の研究テーマを「弘法大師の思想」と考えている私には、今一つ納得行かないものがあつた。丁度その時に、かつて高野山大学で中国哲学を教えられていた加地伸行先生が教訓をくださった。漢文を素材として仏教を研究しようと思えば

森三樹三郎先生以外にいない、という一喝であつた。ここで私の進むべき方向が決まったのである。

私も教典の仏教漢文は、サンスクリット語・チベット語・漢文の三本を対照して読んできたつもりである。そこである程度は漢文を読めると思っていた。大阪大学の授業は、漢字のみを漢文として読んでいた。これはあたりまえのことであるが、私は度胆をぬかされた。私はそれが出きなかったからである。この時は森先生が遠く彼方の山の上で山を尻の下にして座している不動明王のように思われた。その不動明王は左手に持っている絹索で私を縛り、右手に持っている慧刀で漢文を読む知慧を与えてくださった。

その知慧を持って私は弘法大師にアタックしている。それから早くも十五年が過ぎようとしている。私の研究生活の中に森先生の影響が大であることを常に感じている。恩師森先生と最後にお会いしお話をしたのは偶然にも先生が逝かれる前日であつた。今はただ学恩を感謝することしかできないこととなった。

森先生の思い出

武田秀夫

今も、石橋駅と阪大までの緩やかなスロープ道を、すり足で

トボトボと歩かれる先生の姿が目には浮かぶ。左肩を少し下げて、今にも大地に吸い込まれるかのように、それは何時も静かで同じ足どりであった。先生、お早うございます。朝寝ぼけの私が、授業前に早々と来られる先生に、この坂道でお会いする機会は少なかった。フト立ち止まられて、ヤア、お早よう、どうもどうも。暖れた声である。一言二言、話を交わす。セッカチな私の歩調も極端に遅くなり足がからまる。今も先生の少し後ろから声を、と思っていたのに、もう先生の二歩も三歩も前になっていた。先生の後ろから来て、うまく挨拶が出来、歩調もどうにか合わせられるようになるのは、もうしばらく後のことであった。そして話したな私は、寡黙な先生と、そのままトボトボと校舎に入る。失礼致します。どうもどうも。微笑を堪えて小柄な先生が部屋に行かれる。物静かで優しい後ろ姿である。

私は、何かしら、先生の研究室での、今終ったばかりの授業後の、あのホッとした騒ぎの中で、しきりにモジモジしていた。だれかがお茶の用意をしている。先生もにこやかな様子で、すぐ右斜め前に居られる。先生は聖人ですか。突然で唐突であった。私は何を考えていたのかわからない。言い淀んでいたことが、何であったのか。騒ぎの中での先生の反応はすばやかった。キッと顔を向う横にそらしながら、何と、アホな。私は慌てていた。先生は、中国の聖人のことをどう思いますか。聖人とは何物で、どう考えたらよいのですか。そんなことを多分聞きたかったのかも知れない。中国哲学を学び始め、やたら聖人の登

場に面喰っていた頃である。そして、今とは随分違った意味で、本当にすごい先生と思っていたのであるから、聖人の学問をしている先生が、聖人でないのもおかしい事だ、そんな短絡をしたのもわかる気がする。しかし、それにしても何と頓馬なことを聞くアホか、と私が思った以上に、先生が感じられたに違いはなかった。

先生がかなりの毒舌家であり、話し上手で決して寡黙でもなく、研究姿勢の極めて厳しく、学問的な話になるとねばり強くなる、学者としての本当の先生を知るようになるのは、その後からであった。ニヤリとされてすぐ元の穏やかな顔に戻られた先生が、その後どのような話をされたか憶えてはいない。

受講生の数名と、坂道をトボトボと下って行く先生を囲みながら、ワイワイと喫茶店へと目指したのも、今は再び返らぬ夢となった。

先生に甘えるばかりの、愚鈍の上に怠け者の私にも、一つの願いがあった。それは何時かはきっと先生にも読んでいただけるようなまとめた論文を書いて勇んで持参することであった。しかし、それもついに果せぬうちに。

森先生の思い出

塘 耕 次

森先生が四ヶ月ほど入院されて亡くなられた。働き盛りの年で突然亡くなられた日原先生の時ほどの驚きはなかったが、連絡をいただいた時は、やはりショックだった。一時よくなられたとお聞きしていたので、残念な気持ちがして仕方がなかった。木村先生、日原先生につづいて、今度は森先生まで足早に鬼籍に入ってしまった。

私は昭和四十年に阪大に入学し、三年生になってはじめて専門の講義を受けることができるようになった。当時、中国哲学には木村先生、森先生がおられ、助手には野村さん（現愛知教育大学教授）がおられた。木村、森両先生の演習講義は対照的だった。木村先生は担当者に十三経注疏（芸文印書館発行の洋装大型本）の一頁を一人で一気に読み通すことを要求された。読み終ると担当者の隣にいる学生から順番に訓読の誤りや疑問点を指摘させる。もしも、何も言うことができず、パスすると予習していないことがバレて恥をかくことになる。そこで、学生たちには自然に競争意識が起って、張りつめた緊張感があった。しかし、初歩の者には余りに早いスピードについてゆけず、苦勞も多かった。森先生の方は四、五行づつ区切って読ませ、翻訳させ、時々疑問点を本人にただされた。本人がわからなけ

れば、はじめて他の学生に質問される。柔らかない、諄々とさとするような口調である。この口調は、どの演習でもずっと変らなかった。進み方は遅かったが、疑問点ははっきりと理解できるように思われた。

先生は清潔好きで、朝早く研究室に着かれると軽く掃除をされたとも聞いている。その頃の私は不潔好きで、先生を辟易させていたのではないかと思っている。また、朝と夜が逆転する生活を送っていたので、一限目の『資治通鑑』の演習に出るのも苦痛だった。そのことを臆面もなく先生に申し上げ、三回はど出席しただけで、一年間サボリ通してしまった。ところが、成績表を見ると、ちゃんと「優」がついているではないか。これには感激して、その後、『通鑑』の演習だけは珍しくノートをとり、まじめに受けつづけた。

先生は学生たちがよく酒を飲むのを嘆かっていた。お宅の裏にある寺の井戸水が酒を嫌いにさせるといっているので、もって来ようかと冗談で言われることもあった。当時の私はどうしようもないほどの酒飲みで、日本酒の酔いをビールでさましてから、ウィスキーに入るといふ具合だった。考えてみると、私は先生を怒らせる悪いことばかりしていたのかも知れない。

出来の悪い子は親にとってかわいいという。不肖の弟子も同じなのか、私は先生のきびしい顔を一度もみたことはない。論文の内容や、結婚式のあいさつでは、くそみに言われたこともあるが、それでも、ある種のやさしさを感じることができ

た。中には先生が恐いという人もいたが、私にとっては慈父のようだった。しかし、先生の前にいると重圧を感じて逃げ出すくせのある私は、亡くなられた三先生とも、余り話をする機会はなかった。こちらが逃げ回っているのに、愛想をつかして、今度は森先生の方から永久に帰って来れない所へ逃げ出されてしまった。もっとお教えを受けなかったのが、今となっては残念で仕方がない。

『中国古代神話』

野村茂夫

森三樹三郎先生の数多い著作のうち、先生個人で出された最初のものは、昭和十九年に出版された『支那古代神話』である。この書はその後の神話学、宗教学などの研究の進展に伴って、現在の最先端の研究水準から見ると、やや古めかしいところがあるかも知れない。しかし、その明快かつユウモアの気配さえもただよわせた文章、説得力にあふれた語り口、いま読んでも魅力ある書物である。また、そこに神話の資料として引かれたものは、中国の文献に見られる主要なものをほぼ網羅しており、書物の最後に付けられた索引を利用すると、中国古代の神話、伝説の資料集としても好個の一冊である。

ところで、この書物は昭和三十年代、私の学生時分には手に入れることが極めて困難であり、古書目録にも当時としては驚くような値がついていた。そのうち、私が大阪大学の助手をしていた四十年代のはじめ、当時、中国関係の書籍を扱っていた大安書店の横田さんがやって来て、森先生のこの本を「中国學術研究双書」なるものの一冊として出したい、と申し出られた。書名の支那を中国に変える、出版部数が少ないので印税は払えない、その上、写真にとって複製するのだが、その、元にする本が無いので、森先生から拝借したいとの条件であった。多分、幾らかの謝礼は払われただろうが、中に立った私も、先生が承知なさるか、いささか心配したものである。案するまでもなく、お許しはしたが、そのとき先生が申されるには、この本には間違ったところがある、出来れば、訂正したいのだが今回は写真複製だから、それは不可能だろうが、とのことであった。以来、この書物を目にする度にそれが気になっていたが、この機会に一言このことに触れて置きたい。森先生が誤りとされたのは、本書一一〇頁に西王母を論じて、史記趙世家の索隱の言葉「余、嘗て之を聞けり。代の俗、東西陰陽の出入する所を以て、其の神をたつとびて之を王父母と謂うと」を引いて、この「代」を地名にしておられるところである。

先生は、史記索隱の作者、司馬貞は唐代の人である、だから太宗の諱を避けて「世の俗」とするところを、「代の俗」としたのである。それを、代の地方の習慣、と解したのは自分の誤

りであった、と言われるのである。

果してそうであらうか。史記索隠に唐代の天子に対する避諱が多いことは、それを一読すれば誰しもが気付くところである。そのうちでも「世」を「系」または「代」に改めているのが、最も顕著な例である。しかし、必ず改変しているかといえ、そうでないところもある。また、地名として代を用いることがあるのは言うまでもない。だから、「代」とあるもの全てを「世」と解する必要のないことは、勿論である。そこで、森先生が御自身で誤りとされたところも、或いは先生の杞憂ではないかというのが、私が抱いてきた疑問である。この問題について、詳しく論じる余裕は今ないが、一、二思いつくことを述べておこう。

史記封禪書に陳寶についての記述がある。陳寶とは陳倉県に祀られた宝の意であるが、索隠は列異伝を引用して陳寶には雄雌があり、祀られたのは雌のほうであるとして、「ゆえに代の俗これを寶夫人祀と謂う」と言う。ここに「代の俗」が登場するが、祀られているのは陳倉県で、陝西省にある。そうすると今の山西省北部にあった代とは隔たっており、この「代」が「代の地方」ではなく、「世間」というぐらゐの「世」を意味することは明らかであらう。

この例からみると、森先生はやはり誤っておられたかのようである。しかし私にはなおそのように言い切れないところがあるように思われるのである。その理由の一つは、趙世家の索

隠の、先生が引かれた一文は、実は蜀の譙周の言葉で司馬貞が引用したものであることである。索隠を通覧したところ、他の人の言葉、書物などを紹介している場合には必ずしも避諱していないのが実情である。だから若し譙周が「世俗」としていたならば、司馬貞はそのまま残していた可能性がある。してみると、この場合の「代」も「世」を改変したものであるとは限らない、と言えるであらう。

その第二の理由として、文気がある。もう一度、趙世家の索隠をみるに、譙周の言として「余常に之を聞く、代の俗、東西陰陽の出入する所を以て……」とある。この「常」を森先生は「嘗」としておられる。多くのテキストは常とするが、嘗とするものもあり（史記會注考證校補による）、意味のうえから言っても、それが妥当であらう。されば、「嘗て聞いた事がある、世間の習慣では云々」よりも、「嘗て聞いた事がある、代の地方の習慣では云々」に、より自然な文脈の流れが認められるのではなからうか。

以上の二つの理由は、なんら決定的なものでないことは言うまでもない。そこで、今後、更に史記索隠を中心として多くの用例を調べ、この問題に自分なりの何らかの結論をだし、更に嘗ての中国社会における避諱のならわしの意義を尋ねる、これも森先生が私に遺された数多くの宿題の中の一つであると、今は思っているのである。

森三樹三郎先生との

出会いと別れ

橋 本 高 勝

森先生の警效に接して間もない頃、先生から相續いて二本のご論考をいただいた。その一本は、先生五十一歳、『大阪大学文学部創立十周年記念論叢』に発表された「王充の運命論のものと歴史的意味」であり、もう一本は、先生五十四歳、『東方学』第二十四輯に発表された「論語「五十而知天命」の兩義」である。その頃、先生のお年は五十歳を越えているだろうと、とくに後者の論考から、推測しただけであった。むろん、二本の論考は、当時はほとんど中国学のなんたるかも理解するに至っていなかった私にさえ一氣に読み得たほどに、極めて明晰であるが、そのみごとに立論がどうして生み出せるのか、知るよしもなかった。

後に知り得たことであるが、先生の場合、論文発表に至るまでには凡そ二段階の下作業がある。その第一段階は読書と資料カードの作成であり、第二段階はそのカードをもとにしてのノート作成である。そのノートは受講中にしばしば覗き見することができた。カードの方は、私の在学中のほとんど終りの頃、お

そらく先生は忙しさのあまりノート作成の時間もとれなかったからであろうが、二三度カードを並べて講義された時に、その形を拝見することができた。それは半紙を刻んで作った手製のカードで、ゴムバンドで括っていた。先生はよく、論文とは料理のようなもので、まだ台所に在る半製品のままを、人に見せるものではない、といわれていた。今、われわれは、補足の欄外書き込み、付箋や抹消の斜線・交叉線など、幾度も手を加えられたノート、あるいはカードによって、先生の発表された諸著書、諸論文の下作業の軌跡を、見るができる。それはちょうど人事の限りを尽したともいえる思索の熟成、表現の練成のための軌跡である。先生はおそらく苦笑しておられることであろう。

また、在学当初、合同資料室に諸学科の助手が雑居し、学生もそこによくたむろしていた、いわば混沌の時代、ある先輩から、森先生のご自宅での主要な研究時間帯は朝食前のなん時間かで、若い時からの習慣となっている、ということ聞いた。その時は、先生の強靱な精神力を思い、用意の周到さに感嘆したものの、とうとう真似ることもできずじまいで、今は、私自身、五十の峠を越えてしまった。

そこで思うに、「五十而知天命」章の兩義についての論考はあるいは先生自身、人生の節目を自覚したことに重ね合わせになつていたのではなからうか。

先生によると、その兩義とは使命と運命とであるが、「宿命

論こそ、なべての神なき立場が、最後に行きつくべき帰結にはかならない」として、その章に安心立命の孔子の境地を読みとられた。先生もまた「人事を盡して、天命を待つ」人生であった。これを締め括るような先生晩年の言葉、「心の準備は自然にできるものです」と。

森先生と死

平 木 康 平

先生は、昨年の四月十九日、肺炎を患われ、京都府立医大病院に入院された。八月二十九日、薬石効なく世を去られるまでの四ヶ月あまり、闘病生活が続いた。その間、先生の念頭にあったのは、病状が次第に快方に向いつつあること、一時も早く退院し、ふたたび仏教大学の教壇に戻ることに、ただそのことだけであった。ただし実際には、入院当初からその病状は樂觀を許さず、一進一退の経過をたどりながら、徐々に衰弱してゆかれた。最後まで意識ははっきりしていたし、始終驚くほど我慢づよかった。点滴の針が血管からはずれ腕が棒のように腫上がった。痛い一言もなく、看護婦がそれに気付くまで黙っておられた。

そんな先生が、「痛いなあ、たまらんなあ、もう死ぬよりしよ

うがないかなあ」と、死を覚悟し、初めて「死」という言葉を口にされたのは、息をひきとる僅か四時間前であった。夜が開けるとともに、病院の辺りの木立は鳴きしきる油蟬の声に包まれた。「頓て死ぬ気色も見えず蟬の声」、この芭蕉の句と、先生の入院中の姿とを、私は心の中で重ねあわせていた。今わの際まで、死の予感の訪れが、先生にはなかったかに見えた。しかし、死に対処する心の準備は、すでにあつたことであろう。先生晩年の著、『老荘と仏教』の最後に付せられている「死の象徴としての阿弥陀仏」の一篇は、その「あとがき」のなかで、みずから語られるように、先生の「個人的な宗教観の告白」と考えてよいが、その中で「死」について語っておられる。宗教的な要求は根強くありながらも、理性をこえたものへの信仰ということとは、至難のわざである。道元や日蓮や一遍に倣って厳しい修行をすることのできない自分は、浄土真宗に好意を寄せる。しかし、西方十万億土の彼方に、浄土や阿弥陀仏が実在するといった神話を、そのまま信ずることはできない、と述懐されている。

ところが、親鸞の最晩年の『自然法爾章』に「無上仏とまふすは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆへに、自然とはまふすなり」という言葉を見出し、そこでは阿弥陀仏が無形のロゴス的な存在として説かれていることに注目される。すでに清沢満之がこの方向を推し進め、究極的な存在を「絶対無限」という言葉で表現しているが、先生はそれを「死」とい

う言葉に置き換える。「生は瞬間のものであり、死は永遠のものであり」、「われわれ人間は無限の死の世界から生れてきて、ほんの瞬間の生を経験し、ふたたび無限の世界に帰ってゆくのである」とし、「この無限の死の世界を生否定とは考えず、むしろ生を包みこむものとして捉えるのが浄土教であり、浄土教は死の肯定の宗教であり、阿弥陀仏は死の象徴である」。これが、この一文の結論であり、同時に先生の死に対する思索の結論だと考えてよいであろう。

『神なき時代』の

森三樹三郎先生

宮内 徳雄

丁度十年前に拝受した森先生御著『神なき時代』（講談社現代新書）は、故木村英一先生の『論語』（講談社文庫）と共に、常に座右にあって御生前さながらに拙問にお答え頂いている二書である。山片蟠桃の『夢之代』の研究を課題として阪大の大学院に在籍させてもらった頃から、森先生の御信条・世界観は私の研究の大きな支えであった。先生はこの御著で、「蟠桃の無神論は彼自身は触れていないが王充の『論衡』の影響を大い

に承けている」と述べられている。この御卓見だけでも先生は正に蟠桃研究においても翹楚と申し上げべく、又以前からその点の御示唆を頂いていた私も、その後『夢之代』の中に『論衡』についての記述があるのを発見し、先生の御先見を確かめることができた。

研究室で私が蟠桃受け売りの合理主義で孔孟の儒教を批判した時などにも、先生は中国哲学者としてそんな話を聞くのは表面迷惑そうにされながらも、内心我が意を得たりという風に温顔を綻ばされて「あなたの話を聞いたら获生徂徠が泣いて喜ぶだろう」というような御批評を下されたので、浅学の私はその場で御真意を計り兼ね、却ってきょとんとするような一幕が何回あった。このように普通なら叱責されて了るような不肖の弟子の稚拙や異端が、先生の御海容によって救われ励まされたことは度々であった。御温情に甘えて遂には直截に、孔子は有神論者か無神論者かと先生の御判断を伺ったことさえあった。御答えは御著にあるように、「孔子はぐうたら無神論者である。生きた人間に仕える道徳が優先するのであって、死んだ人間のこととは後まわしにせよといういわば道徳的無神論であったが、ただ社会秩序や家族制度の維持のために祭祀の礼も無視できなかったのだ」とのことであった。

この点は蟠桃の孔子無神論者説と殆ど一致しておられる。森先生の御考えは西欧的科学合理主義の目で東洋思想の本質を見抜こうとした蟠桃の現代版とも申し上げられる。さればこそ先

生の御存在は私にとって師表そのものであり、その御掌の中で蟠桃研究を模索してきたのである。まだまだ先生にお教え頂きたかったことは山程あったが、思いがけずも早く幽明境を異にされた今となつては詮方ない。冥府に先生の御靈魂がおられるなら、今後の御教示をせめて夢でなりとも賜りたい。もしお応えがなければ、やはり先生の御信条は無神論であつたと信じ、それを最後の御垂訓と考へて、私も亦神なき時代の非合理に満ちた人生の運命を、永遠の闇の世界まで迎えられるだけ迎つていかずばなるまい。森先生が『神なき時代』の最末尾に書き残されたこのようなお言葉のままに。

想　い　起　こ　す　こ　と

安　本　博

森先生に初めてお会いしたのは昭和三五年の春休みであつた。電話などが普及していなくて、電報が重要な通信手段であつた頃、その電報を戴いて研究室へ来るようにとのことであつた。教養課程を終えて学部に進むにあつたの時であつた。今の文学部の建物ができたばかりで、東洋史の山田信夫先生と同室で二階の研究室におられた。何のことで呼び出されたのか、若干の戸惑いもあったし、また緊張もしてお会いしたことを想い起

こす。学部進学に際してのいろいろなご注意であつた。「何も存じませんので」との今思えば不遜な発言に、先生は「わたしだって何も知りませんよ」とおっしゃられたのをずっと記憶している。

森先生は、特殊講義では、「天道観の歴史」を講述されていた。東洋史の学生とわたしは聴講していたが、どこか畑違いの専攻の女子学生がめずらしく受講に來たことがあつた。一、二度出席して比較的熱心に興味・関心を抱いて聴講していたようにわたしには思へたが、何回目かの時に、先生はその女子学生に、単位のことなら心配しなくてもよいから出て來なくてもよいとの趣旨のことをおっしゃられたことがあつた。旧制の大阪高校で教鞭を執つておられたとき、全員の学生に八〇点をいつもつけられていて、やはり高等学校は違う、と感歎していた学生がいたという話を伝え聞いていたので、いかにも森先生らしいシニカルな一面であるように思へ、忘れずに記憶に残っている。

これは学部の学生の頃、昭和三六年の秋のことである。先生から直接おうかがいしていたわけではなかったが、あの個性あふれる集団であつた西鉄のファンであると仄聞していたこともあつたが、内心は怒られるのではないかと危懼を抱きつつ、一方では森先生なら聴き容れて戴けるのではないかという甘えもあつたが、木曜日の昼からの授業の前に、日本シリーズの南海巨人戦のＴ・Ｖ観戦をお願いした。幸いにもお許しが出て、森

先生・野村さん、今はもう亡くなられてしまった田中利明さんらと生協の食堂で最後まで観戦した。円城寺あれがボールか秋の空、という有名な俳句が生まれるほどの南海ファンのわたしには残念な結果であったが、TVを観た後で一時間ほど『周禮注疏』の演習をされた。ついこの間のことだったようにも思えるし、ずっとずっと昔のことだったようにも思える想い出である。

森先生の学恩

吉 永 慎二郎

昭和四十七年、東洋史に二年間在籍した（文字通り在籍だけでまともに勉強せず、学問トハ何ゾヤなどとややこしい事に頭をひねっていた）が、その後、中国哲学にお世話になることになった。実を言えば余りにも勉強をしない男なので体よく放り出されたようなもので、東洋史の助手は私が久しぶりに研究室に來たのをつかまえて、「キミにはじっくり中哲をやる方が向いているだろう。これから森三樹三郎先生に紹介するから」と言った。そして連れて行かれた処が四階の森先生の部屋であった。老聃もさもありなんという大きな耳と温厚な笑顔の森先生が、助手の説明を聞かれて何と言われたか、実は覚えていない。

ともかく歓迎していただいているのだからとまじめに勉強する気になったのは確かである。

だが、東洋史に在籍しただけの男がいきなり院生と同じ（當時中哲の学部生は私一人）授業を受けてまともに漢文が読めるわけがない。森先生は東洋史に二年いたのだから少しは読めるだろうと、方東樹の『漢学商兌』の演習で私に読むように指示された。ところが、引用されている論語・季氏篇の「生而知之」を「生キテ之ヲ知ル」などと読んでしまい、同席の先輩諸氏の失笑を買った。森先生もこれはチトひどいと思われたのであろう。その後この演習では二度と当てられず、もっぱら『通鑑』の講読を課せられることとなった。

翌四十八年、森先生は退官された。今にして思えば誠に汗顔の至りである。が同時に、わずか一年にせよ碩学の警咳に接し得たのは吾が身の幸運であった。退官に際して森先生から頂戴した一書が『上古より漢代に至る性命観の展開』であった。この書のテーマ、へ中国思想における超越と内在こそ、私が模糊として摸索していた問題設定の方向を開示するものとして、その後の私に少なからぬ影響を与えることとなった。

ウェーバーの方法論を武器とされた先生は、経学的方法論理に対する批判を込めてであらう、よく「論語はアメリカインディアンの酋長の言葉と同じだ」とのウェーバーの言を借りて論語の超論理性・非主知的性格を評された。西洋に足場を置いて東洋を見るというこの先生のスタンスは、その中国思想史、有神

論から汎神論・無神論への展開として中国的思惟の展開を見るという思想史にも保たれている。だが、晩年の先生はこのスタンスを換えられたように思う。即ち仏教的視座に拠って東洋に即して東洋を見るという立場である。先生の『莊子』『無の思想』にはそのことが反映されているように思われる。

だが、残念なことに、この視座からする中国思想史の新たなとらえ直しは、ついに課題として残されてしまったようである。思えば、かかる課題を後生に開示されたということ自体が、今の私にとっては森先生の最大の学恩とも感ずる次第である。

森先生宅会読の記

若 槻 俊 秀

四月十七日（木）六時三十分、今年度通鑑会読会の第二回目が森先生のお宅で開かれた。いつもの通りに先立ってのよもやま話の後、その日の担当者は確か、花園大学の西尾賢隆氏による読み合わせが進められた。時折り先生がストップをかけられる。その時は問題のある個所であることが常である。その日もやはりそうであった。「資治通鑑」唐紀七十一の途中、編年体歴史書の面白いところで、黄巢の乱の主謀者黄巢の登場記事が頻繁となる辺り。唐王朝も終末を迎え始めていた。先生の解説

もいつも通りで私共の蒙を適切に啓いて下さった。しかし後で思えば、その日の先生のご様子は、どこか疲労感を漂わせていられたようであった。ここ一年前後より呼吸器系統のお弱い先生の何とはなしの思つかいの荒さは少なからず気にはかったが、自説を展開される時の自信あるお話し振りを見聞きしていると、そんな懸念も杞憂に思えた。ところがその翌朝より風邪ぎみで少々身体がだるいといわれて寝込まれ、ついには日曜日の朝、寝台自動車で府立医大病院に入院、そのまま四ヶ月余りの八月二十九日未明、不帰の人となってしまうたのである。先生には、大谷大、阪大をつうじてご懇篤なるご指導を仰ぎ続けた私であるが、この先生宅での会読の会からも、それ以上のお育てを受けたこと、感謝しきれぬ思いで一杯である。

実は先生宅の会読は、二十五・六年前に始まったものである。仏教大より大谷大大学院に進まれた別府信空氏（現尾道市在住）が横超先生の厳しい演習に備えて漢文読解力の練成を先生に強引に依頼されたことがきっかけであったという。授業以外に毎週ご自宅でのご研鑽の貴重な時間をとられることに先生は多少困惑されたものの、一人では申し訳けないと、修行仲間の岡宗俊氏（曹洞宗住職）、成田俊治、深貝慈孝の両氏（浄土宗住職・仏大教授）等を誘い合っての熱意に応えられての会読は確実に進められ、三十五・六年より四十年の七月に至って『論語義疏』（世界書局本使用）を読みました。中国学を特に専攻されたわけではなかった諸氏の為に、同じことを繰り返す教え

られて倦むことのない先生のお慈悲に発奮して、知らず知らずのうちに年を経てしまったわけである。私は三十九年、微子篇よりの参加である。四十年九月より四十四年頃まで『郭象注莊子』（芸文印書館本使用）の内篇七篇を読了。ちょうど先生の『莊子』（世界の名著）ご執筆の時期と対応している。四十五年頃より『資治通鑑』を読むことになり、特に六朝・隋・唐という中世の精神史を探索する一助とすることを目指して魏紀より今年四月まで十六年間唐紀の終り近くまで読み続けたのである。その間のメンバーは、発起の方々の他に、福島光哉・三桐慈海（大谷大）、池見澄隆（仏教大）・古賀英彦（花園大）・中西啓子（新潟大）、今井秀周（東海女大）、平木康平（大阪府大）、武田秀夫、小林武（京都産業大）、黄濟清（京都在外大）等の各大学で活躍の諸氏が時期的な出入りを有しながら、それぞれ先生のご鞭撻を忝けなくした。

それにしても忘れてはならないのは、いつも先生の陰にてお茶や寒さの中を帰る私共にお酒の接待をして下さったりして、とかく挫けがちなわれわれを支えて下さった奥様のおやさしいお心配りである。偉大な先生を失われた奥様のお寂しさを切に想いつつ、先生の跡を踏むのでなく、後学として先生の求められた所を求めるべく今後一層精進することを誓う次第である。

森三樹三郎先生挽詞

林 宏 作

懸車挽不起、白日墮虞淵。哲人一以薙、雷霆震山巔。憶昔拜師日、霏霏雨露邊。春風垂楊柳、待我綺窗前。諭教循魏晉、鼓琴悟坤乾。蘇門今寂寂、嘯歌復誰憐。斯文終未喪、問字唯遺篇。再過黃公壚、腹痛淚如泉。